

<p>団体名</p>	<p>一般社団法人merry attic</p>	<p>活動タイトル</p>	<p>保護者のレスパイトケアを通じた児童虐待予防のための、子どもの居場所づくり</p>	
<p>望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p>■ 活動風景</p>	
<p>●地域の望ましい社会状況(ビジョン)</p>	<p>地域で子どもを育てるとい地域力の向上と、助けたい、なんとかしたいという思いを持つ大人や関連機関のネットワークがあること</p>		<p>天体観測</p> <p>宿泊時に行った天体観測の写。夜にしかできない学びを宿泊時に実施した。</p> 	
<p>●団体の社会的役割(ミッション)</p>	<p>「力になりたい」に、はじめの一步を社会が抱える課題は、刻一刻と変化し続けています。はるか昔から、そして、今この瞬間も。どの時代にも、社会課題やその渦中にある人に対して「何とかしたい」「力になりたい」と志を持ち、一步を踏み出す人たちがいました。「志」は、いつの時代にも必ずあります。それは一步踏み出して挑戦することで育まれ、社会課題を突破する原動力となるのです。merry atticのミッションは、次の世代、そしてまた次の世代へと、「志」をつなぐこと。そのために、「今」に夢中になれる場所、はじめの一步を踏み出す挑戦の場をつくります。</p>			
<p>●団体の活動基盤</p>	<p>●望ましい人的資源： 挑戦し続けられる人の集団でありたい。現在も、舞台俳優をしながら活動している職員や、海外の児童分野で活動することを夢見、英語の勉強をしながら活動している職員などがある。そのような姿を子どもにも伝え、はじめの一步を子どもたちが踏み出す勇気の一助になりたいと考える。</p> <p>●望ましい物的資源： 子どもたちの発達、成長のために「必要なもの」だけでなく、「あったほうが良いもの」も準備できる状態。</p> <p>●望ましい活動資金： 健全な団体運営のために、寄付等のみに依存した活動資金体制ではなく、継続した事業委託などで基盤をつくり、職員の処遇改善にも積極的に取り組んでいる状態。</p> <p>●望ましい情報： 国のめざす方策や、行政の指針などをいち早く入手できる状態＝情報の出どころに意見を聞かれるような状態。</p>			
<p>■ 活動報告</p>		<p>■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>		
<p>・宿泊型子ども食堂（一時的に養育を代わる事業）の実施 月に1度、週末に宿泊を伴った子どもの居場所づくりを行った。保護者の子育てで疲れに対するレスパイトケアとして、一時的に子どもを宿泊を伴って預かることによって、子育て疲れの緩和をめざした。</p> <p>・子ども食堂の実施 宿泊型子ども食堂に付随して、月に1度、子育て世帯に対する食事の提供を行った。本子ども食堂では生活困窮など、世帯区分にとらわれずに子育て世帯全般を対象とし実施を行い、食事をとった後には子どもたちはボランティアスタッフで見守りを行い、保護者がホッと一息つける時間と居場所を提供した。</p> <p>・子どもの経験/体験支援の実施 宿泊型子ども食堂では、保護者の子育てで疲れに対するレスパイトケアを大きな目標として実施をしたが、宿泊をした子どもに対しても、新たな経験や普段できない体験を宿泊の中で得ることができるように経験/体験ができるイベントの実施を行った。</p>		<p>・一時的に養育を代わる事業 ①開催 23日の実施 ②目標アウトカム「再度利用したいかという問いに対して」：参加者の100%が再度利用をしたいという回答 ・相談窓口の設置 ①設置を行い、チラシの配架を行った。 ②窓口の設置に対する認知は50%程度</p> <p>・子ども食堂の実施 ①開催 10回の実施 ②目標アウトカム 参加者の人数：平均約50名の参加があった。</p> <p>・協賛企業の獲得 ①地域企業の5社の協力を得た ②子ども食堂に対する援助をいただくことができた。</p>		
<p>■ 事業を通じて得られたノウハウ</p>		<p>■ 望ましい社会状況を達成するための課題</p>		
<p>・当団体が京都府京都市で行ってきた子どもショートステイ事業を、別地域で行うことにより、地域によって異なるニーズを理解することにつながった。 ・地域によって異なるニーズに対しての発信方法の工夫について理解が深まった。例えば、京都市で行う事業では、児童虐待の発生予防などが明確に挙げられ、発信にも用いることができたが、今回の地域においては、子育て疲れに対する着目であり、子どもの宿泊支援としても広報することで、保護者の利用へのハードルを下げる事ができた。 ・子ども食堂の実施において、協賛企業を地域内で募り、地域と協働して実施することができた。</p>		<p>今年度は月に1回から宿泊型子ども食堂事業を行ったが、子育て疲れが顕在化し始めた家庭に対しては反復しての利用によって、子育て疲れが解消していくはずなので、頻度を多く実施することや、受け入れ人数を多くすることを検討しなくてはならない。 子どもの経験/体験支援について、より質の向上をめざさなくてはならない。宿泊を伴う支援であるが、子育て疲れに対しては、子どもに合理的配慮を有する場合があるなど、課題は幅広く存在していた。支援にあたるスタッフの育成にも着手しなくてはならない。</p>		
<p>この1年間の活動を通じて</p>			<p>月に1回以上の宿泊支援で子育て疲れの緩和に寄与するとともに、「宿泊を通じたレスパイトケア」の重要性の認知向上</p>	<p>を達成しました。</p>
<p>■ 受益者の具体的な変化（自由記入）</p>			<p>・利用者（保護者）からは、レポート利用の希望が相次いだ。子どもの経験/体験支援や、子どもが楽しいと思える場所を作ることで、保護者が少しの休息を取ることにハードルが下がった。</p>	